

● *The Cay*

ありがとうチモンシー

T.テイラー/白木 茂訳/武部本



のりがとうちモシー

T. テイラー/白木 茂訳/武部本一郎画



訳者紹介 白木 茂 (しらきしげる)

1910年青森県に生まれる。日本大学文学部英文学科卒業。英米の作品を中心とした児童図書の翻訳にたずさわる。主な訳書に「SOS地底都市」「空とぶ自転車」「四次元世界の秘密」等多数。

画家紹介 武部本一郎 (たけべもといちろう)

1914年大阪市に生まれる。子どものものからおとなむけのものまで、本の装幀・挿画に幅広い活躍を続けて多くの作品がある。

あかね世界の児童文学

ありがとうチモシー

訳者

発行者

印刷

製本

発行所

しらき しげる
白木 茂

岡本 陸人

新興印刷製本株式会社 (本文)

錦明印刷株式会社 (オフセット)

中央精版印刷株式会社

株式会社 あかね書房

東京都千代田区西神田3-2-1 〒101

電話 03 (263) 0641 <代>

1975年5月15日発行 第2刷

NDC 933

8397-16801-0027

ありがとうチモシー

白木 茂訳

あかね書房 1975

197p 21cm (あかね世界の児童文学1)



1975 Printed in Japan 訳者との契約により検印なし
落丁・乱丁本はおとりかえします
定価はカバーに表示してあります

ありがとうチモシー
もくじ



第一章	ウイレムスタットの町で……………	6
第二章	大型タンカーの沈没……………	20
第三章	いかだの上に……………	34
第四章	目が見えなくなる……………	51
第五章	漂流……………	64
第六章	島だ！ 島だ！……………	71
第七章	無人島へ上陸……………	77
第八章	島の生活……………	88
第九章	チモシーの教育……………	98
第十章	島のたべもの……………	104



第七章 魔 ^ま よけをつくる……	113
第三章 チモシーの病気……	125
第三章 ヤシの木にのぼる……	131
第四章 ハリケーンの前ぶれ……	143
第五章 ハリケーンの襲 ^{おそ} 来……	150
第六章 鳥におそわれる……	160
第七章 ねことふたりつきりで……	169
第六章 とびさった飛行機……	174
第九章 救助される……	184
作者と作品について……	194

装幀・插画／武部本一郎



THE CAY by Theodore Taylor
Copyright © 1969 by A.Watkins Inc.
Japanese translation rights arranged
with A.Watkins, Inc., New York .
through Charles E. Tuttle Co., Inc., Tokyo

ありがとうチモシー

シオドア・テイラー 白木 茂訳



第一章 ウイレムスタットの町で



まっくらな夜の海を、物音ひとつたてずに泳ぎまわる飢えたサメみたいに、ドイツの潜水艦は、ま夜中にやってきたのだ。

ぼくはウイレムスタットの町で、破風づくりのみどり色の家の、せまい二階でねむっていた。その町のあるキュラソー島は、ベネズエラ国の沖合いに横たわるオランダ領諸島のなかでも、いちばん大きな島である。

一九四二年二月の、あの月のない晩、ぼくらの島の西側にあるアル・バ島の大きなラゴ石油精製工場が攻撃された。つづいて、湖水用の小型タンカー六隻が撃沈された。このおけみたいにずんぐりしたタンカーは、原油を、マラカイボ湖からキュラソー石油会社へ運んでいて、原油は、そこで灯油やディーゼル・オイルに精製されていたのである。

夜明けには、一隻のドイツ潜水艦が、ぼくのいる町ウイレムスタットの沖合いに見られたという。

そんなわけで、ぼくが目をさましたときは、町は大さわぎだった。この町は、オランダ本国

の町と似ているのだが、ちがうのは、どの家も、ピンクとか、みどりとか、青などのやわらかな色でぬられていることと、堤防がないことである。

ぼくは、朝食のおわるのが待ちきれなかった。それというのも、町でいちばん古い繁華街のパンダや、海を見はらせるアムステルダムとりで、へいってみたくてたまらなかったからだ。敵のUボートを見られるものなら、ぜひ見たかったし、みんなといっしょに、そいつにむかって、げんこをふりあげてみたかったのである。

ぼくは、おどろいてなんかいなかったが、ただ、ひどく興奮していた。いままで、戦争のことは、ずいぶん話には聞いていたが、実際には、なにひとつ見たことがなかったのだ。それが、世界じゅうまきこまれているこんどの戦争がとうとう、このあたたかな、青いカリブ海にある、ぼくたちのところまでおしよせてきたのである。

母さんが、まっさきにいったことはこうだった。

「フィリップ、敵は、とうとう、この島にまでせめてきたんだよ。きょうは、学校はお休みになるだろうが、家の近くにいますよ。危険ですからね」

ぼくはうなずいた。だが、建物のあいだや、あの有名な浮き橋の上や、ショッテガート港やセント・アンナ湾にたむろしている船のあいだをぬって、どうやって、敵の潜水艦の弾丸が、このぼくにあたるんだろう？ そんなことは、とうてい考えられなかった。

そこで、その日の朝、母さんが灯火管制用のカーテンがちゃんとなっているかどうか、見て

まわったり、びんに何本も飲料水をつめたり、食糧をしらべたりしているすきに、ぼくはそ

っと外にでた。そして、ヘンリック・ファン・ボーフェンといっしょに古いとりでへかけていった。かれは、ぼくのアランダ人の友だちで、ぼくとおなじように十一歳だった。

ぼくは、二、三年まえまでは、この古いとりで、ヘンリックたちとよく戦争ごっこをやっていた。海賊やイギリス軍から、ウイレムスタットの町を守ったものだった。実際に、ずっとむかし、イギリス軍が、この島にせめてきたことがあったそうである。

ときには、ぼくらがオランダ軍になって、せめてくるスペインのガリオン船（むかしのスペインの大型帆船）をやっつけにでかけることもあった。ガリオン船がせめてきたことも、ほんとうなのである。それが、あんまり真にせまっていた、実際に水平線のむこうから、高く帆をかかげた船が見えてくるように思ったことも、二度や三度ではなかった。むろん、それは、ぼろぼろの帆をあげた原住民たちのあやつる船にすぎなかったのだが。

かれらは、ベネズエラや、アルーバ島や、ボナイレなどから、バナナ、パイヤ、メロン、野菜などを運んでくるのだが、かれらは、ぼくらにとっては、いつも海賊だった。

ぼくらは、甲板にいる、そうぞうしい黒人たちに大声でどなる。すると、かれらはわらいながら、なにかどなっていってしまうのである。



ところで、とりであるが、それは物語の本からぬけだしてきたようで、海に面している高い城壁には、砲門がいつせいにひらいているのだ。もう長いこと、このとりでは、ウイレムスタットの町を守ってきたのである。

ところが、その日の朝だけは、物語の中のとりでのようではなかった。ほんものの兵士たちが銃をかまえていたし、機関銃も見えた。双眼鏡をもった士官が、兵士たちに、白い波がしらのたつ海面に照準をあわせるように命令していたし、みんなは緊張しきっていた。ぼくらは、家にかえれと、追いはらわれるしまつだった。

ぼくらは家へはかえらずに、有名なクイーン・エマ橋のほうへいった。この浮き橋は、シッテガートの大きな港へつづく海峡にかかっている。いかだの上にきずかれているその浮き橋は、船が出入りするたびに開き、パンダと、その対岸のオトラパンダとをむすんでいるのだ。橋の上からのながめは、とりでほどすばらしくはないが、物見だかい人びとは、ここにも集まっていた。ふしぎなことに、海峡には船が一隻もうごいていなかった。浮き橋が開いているときは、人間や自動車を乗せ、いつも往来しているはずのフェリーボートまでが、からっぽのままつながれているのだった。

原住民のスクーナー船でさえ、海峡の内側のドックにつながれていた。黒人たちも、いつものようにわらったり、どなったりはしていなかった。

ヘンリックがいった。

「パパがいつてたけど、アルーバ島は、あとかたもないありさまだつてさ。セント・ニコラスでさえ、攻撃こうげきされたんだからな」

「湖水こすいのタンカーは、一隻せきのこらず沈められちまったんだってな……」
と、ぼくはいった。

ぼくは、そのことが、ほんとうかどうかは知らない。だが、ヘンリックは、お父さんが政府せいふ関係かんけいの仕事をするようになってから、いやに役人めいた口をきくので、いらいらさせられる。

ヘンリックは、丸顔で、ずんぐりしている。髪かみは、麦わら色で、ほおはいつも赤い。いうことも、することも、まじめそのものだ。

かれは、アムステルダムとりでのほうを見ていった。

「いまごろ、あそこに大きな大砲たいほうがならんでいるにちがいないよ」

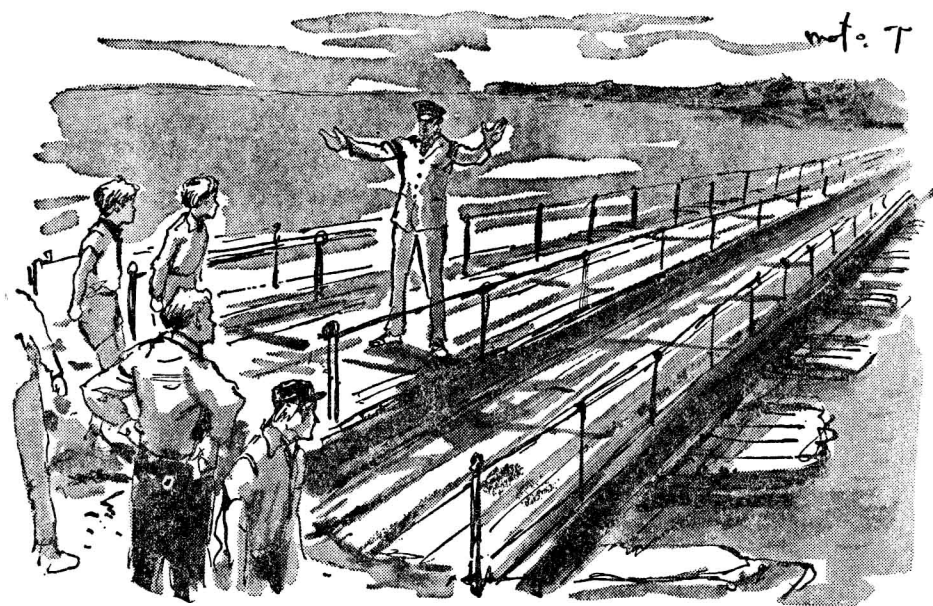
あたりまえじゃないか。そこで、ぼくはいった。

「じきに海軍がやってくるだろうな」

ヘンリックは、ぼくを見つめると、きいた。

「ぼくらの海軍かい？」

オランダの海軍か、という意味である。



「いや、ぼくらのだよ」

と、ぼくはいったが、もちろん、アメリカ海軍のことである。ヘンリックの国であるオランダは、ドイツ軍に占領されてからというもの、その小さな海軍は、ちりぢりばらばらにされてしまっていたのだ。

ヘンリックは、しずかな口調でいった。

「ぼくらの海軍だって、きつとくるよ」

それにたいして、ぼくは、とやこういいたくなかった。オランダがナチに占領せんりようされたのを、だれでも気のどくに思っていたのだった。

そのとき、一台のトラックから将校しょうこうがおりてくると、ひとりのこらず、そのクイーン・エマ橋から立ち去れ、とこわい顔をしてどなった。

「ここに魚雷^{ぎょらい}をうちこまれ、みなごろしにされるかもしれないのが、わからんのか？」

ぼくは、もう一度、海のほうをながめたが、青い海は平和そのもので、そよ風に白い波がしらがたち、その上を白い雲が、ゆっくり流れていた。

しかし、いつものように港へずらりとはいってくる船の列は見えなかった。いつもなら、ずんぐりした船や、大きな船が、いろんな国の旗をひるがえしながら、ショッテガート港へ、ガソリンや石油を積み^つにやってくるはずなのである。

海はがらーんとしていた。帆船^{はんせん}ひとつ浮^うかんでいない。ぼくらは、なんだか、きゆうにこわくなってきて、シヨアルー地区にあるわが家へむかってかけだした。

家についたときのぼくは、青い顔をしていたにちがいない。台所にいた母さんに、どこへいったの、とたずねられた。

「ねえ、母さん、橋にいったんだよ。ヘンリックといっしょに」

母さんはぎょっとしたように、ぼくの肩^{かた}をつかんでゆすぶった。

「あそこへいってはいけないうっていったでしょうに、フィリップ。いまは戦争ちゆうなのよ。わからないの？」

「ぼくたち、潜水艦^{せんすいかん}が見たかっただけなんだよ」

母さんは目をつぶると、やせたからだに、ぼくをひきよせた。母さんときたら、いつもこう

なのだ。いま、ぼくをガタガタゆすぶったかと思うと、こんどはかたくだきしめる。

つけっぱなしにしてあるラジオから、声が流れてきた。タンカーが撃沈げきせんされて、五十六人が死に、オランダ領西インド諸島りやうしよとうの総督そうとくがワシントンへ救助をもとめているということだった。アムステルダムに救助をたのんでも、むだだからだ。ぼくは、その悲痛ひつうな声に耳をすましたが、やがて、母さんはラジオのスイッチを切ってしまった。母さんはいった。

「わたしたちのいいつけさえ守っていれば、だいじょうぶだからね。きょうは、もう二度と、庭からでてはいけませんよ」

母さんは、ひどくびくびくしている。ふだんから、こうなのだ。ぼくが岸壁がんへきから落ちはしまいか、木からころげ落ちはしまいか、ナイフで手を切りはしまいかと、いつも心配ばかりしている。

ヘンリックのお母さんはちがう。大声でわらいながら、

「男の子ときたら、いつもこうなんだからね」

というだけである。

夕方近くになると、父さんが石油会社からかえってきた。父さんの名まえは、フィリップ——フィリップ・エンライトというのだ。石油会社で、航空燃料こうくうねんりようの増産計画ぞうさんけい画にとりくんでいる。

父さんは、朝の二時から起きていらっしやるんだから、うるさく、ものを聞いてはいけませ